



## 日本海中部地震と津波災害の体験談

前号に引き続き、1983年5月26日に発生した日本海中部地震・津波について、被害を受けた秋田県男鹿市及び八峰町（旧八森町）で被災された方々の体験談の紹介です（情報提供：秋田県男鹿市・八峰町）。

### 秋田県男鹿市 Aさん（被災時51歳）

5月26日午前中、私は長男と妻の3人で、船に3枚網を積む作業をしていた。もう昼だなど思っていたところに、あのマグニチュード7.7という地震であった。裏山のくずれるところがあり、木々は地面に着かんばかりの揺れである。その揺れが一応おさまった頃、急に港の中が泡立ちはじめた。昔この辺に温泉が出ていたと言われているところで、その温泉がものすごい勢いで湧き出したとしか思われない様相であった。不思議だとは思ったが、この時点ではまだ、津波のことはまったく考えていなかった。

合川南小学校の子供達を乗せたバスが来たのは、この時である。近くの人達は地震のため外へ飛び出し、今の地震のひどさを話し合っていた。私と長男は、港の中の温泉湧出現象（私達はそうより考えなかった）に気をとられていたが、突然、港の入口から海水が盛り上がって来た。誰言うともなく津波だとさわぎ出した。私も長男も、自分一人が逃げるのがせいっぱいで、周囲の人達がどうなっているのかわからなかった。港の入口から入って来たと思った津波は、すぐ防波堤をも越えてしまった。その引き波によって私の船は防波堤の外側にあるテトラポットの上へ持ちあげられた。長男は、漁師の命である船を守るためにテトラポット上の船へ走ったが、防波堤から見た水平線は自分の背丈より上にあつたというから、第2波、第3波が次々と来ていたものと思う。第1波の津波が、港の水が引かないうちに来たのであるから、第2波以降はどれだけ大きな津波になるのか、私だけでなく加茂の人達は皆そう思ったようである。

ところが、悲劇はこのときすでに始まっていたのである。何が何だかわからぬうちに、子供達が波に浮かび、波間に沈みかけていた。何分か何秒か、誰も手出しは出来なかった。しかし、すぐ助けなければと思ったが、港の中から海水が引いてしまい、子供達は外へ流された。私と長男は、第2波、第3波の津波の恐ろしさを考えているひまはなかった。陸では妻が「父さんあぶないからやめろ」と叫んでいたが、無意識のうちに船へ乗り移った。長男も乗った。

ホテルXの主人も飛び乗った。海水は引いて、すぐ出られる状態ではなかったが、来た波が引くのと同時に海へ出た。顔を二つ揃えて浮かんでいた子供を引きあげた。その子供は船へあがって、「もう大丈夫だ」といっても、私のズボンにしがみつき、陸へあがるまで手を離さなかった。何人助けただろうか、今考えたところでそれは解らない。おびたしい海岸からの流出物がじゃまになり、子供達の姿を探すのにも苦勞した。その間に、何回も海は引く寄せるのくり返して、時間は無情に過ぎて行き、ついに13人は助けることが出来なかった。

### 秋田県男鹿市 Bさん（被災時55歳）

悪夢のようなあの日のことは、生涯忘れることができないであろう。5月26日正午、日本海中部地震の巨大なエネルギーは、一瞬にしてわが家を破壊した。部屋という部屋の床は全部落ち、建具もすべて壊れた。特に、仏壇が中吊りになって傾き、お盆に供えた西瓜が転がるような状態で、父母をはじめとする仏様たちには、誠に申しわけないと詫びた次第である。

ところで、地震発生と同時に全壊となったわが家であるが、家族の安全と火の元の安全を確認すると近隣のことが心配になった。家屋の倒壊はないだろうか。ゲガ人はいないだろうか。火事の発生はないだろうか。消防団員として習性であろう。しかし、消防のハンテンを探すのにもひと苦勞をした。普段なら、どんな暗闇の中でもすぐ手に取ることができるものの、日中とはえ、部屋中一面に散乱している家財の中で、どこへ何がどうなっているのか、それでもわが家の中、やっとのことで探し出し、付近の巡回と警戒に当たった。

男鹿市内でも、最も家屋被害の多かった脇本地区の中で、なお集中的に被害の多かったのが、わが家も含めた付近であった。どの家もまともなところがなく、まだまだ余震が続いているため、誰も彼も皆外で座り込んでいる。あまりのひどさに自分の家のことを忘れ、火の用心のみを呼びかけて回り、火災の起きなかったことが不幸中の幸いと胸をなでおろした。

この地震は、私共が思いもしなかった津波の発生で、多くの尊い人命が犠牲となったことはほんとうに気の毒であり唯々ご冥福を祈るのみである。この犠牲者の中に私の身内の方も入っていたので、殊更に地震の恐ろしさが身に沁みているところである。このたびの地難の教訓は、地震が起きたら津波を考えろ、火を完全に消せばロック塀等のそばへ寄るななどである。いつまでもこの教訓を忘れまい。

### 秋田県八峰町 Cさん（被災時49歳）

朝から天気がよく、青空の広がる暖かな日でした。私たち職員が、昼食を食べはじめた時です。建て物はぐらぐらと揺れ、棚から、物が落ちてきます。まるで目が回るような、激しい揺れでした。「地震だ、地震だ、逃げろー。口々に叫びながら、外へ逃げるのですが、揺れがひどく、足が思うように進みません。やっ和外へ逃れ、その場に立ち尽くしてしまいました。と

でも長い時間に思われたものですが、後で約7分間と知り、意外に感じられました。

本震が収まり、事務室へ戻ったが、すぐ大きな余震。募る恐怖に、「恐ろしい、恐ろしい。」と話し合いました。部屋へ戻り、テレビを見ますと、津波警報です。私はとっさに、マイクの前へ走りより、夢中でスイッチを入れました。「漁民の皆様にお知らせいたします。只今津波警報が入りました。嚴重に御注意下さい。」一度・二度・三度、その時です。バチバリバリと、ものすごい音と同時に、三方にある窓を破って、激しく荒れ狂う波が私をのみこんでしまったのです。泥水の中で、もがくうちに、手に触れたものがあり、まさに必死の思いでつかまりました。事務所の一角にコンクリートで作られた流し台でした。この流しが、私の命綱となってくれたのです。

ハッと気が付くと、流しの上にはいました。その時私の目に映ったものは、事務所に向って襲いかかってくる廃船の姿です。第2波が来たのです。「神様助けて、助けてー。」目をあけてみると、事務所は跡形もなく、壊れ流されています。私と流し台だけが、空の下にぽっかりと残されてしまいました。「ああ！！助かった！！」「皆いるかー。いたら返事せー。」声のかぎりに叫び、流し台から降りようと思うのですが、水の流れが強く足をさらわれて、降りる事もできません。aさんが、「母さん、大丈夫か、皆元気だ。そこを動くなよ。」と声をかけてくれましたので、その言葉にはげまされ、じっとして、滝のような勢いで流れている水が引いてくれるのを待ちました。「母さん、波が引いたからすぐ逃れ」とのaさんの声に、すぐ飛び降りて、待っていてくれた人たちと、滝の間の恵比須神社のそばまで、無我夢中で一気に駆け上りました。逃げおおせたものの、そこで見たものは、無残に破壊された民家、果てなく広がるざんがいの山、悲鳴にも似た人々の声、家がない、家族がない、船が……！！漁港の方では、漁師さんたちが、「母さん、波きたら、さがんでけれや、たのむ。」と言うが早いのか、ロープを持って船へと走る。「また波だ、波来たー。早くこーい。」船は、波にほんろうされ、漁師さんたちの懸命の努力のかいもなく、その船に生活の全てを賭けて来た漁師たちの目の前で、破壊され、一隻、また一隻と沈んでいったのです。どの人も声を失い、青ざめ、肩を落し……。たくましい海の男の、うって変ったその姿は、私のまぶたに、やきついています。

海の方から、目を転じると、道路の上に、男の人が倒れています。上下のカップで、頭と右手首から血を流していました。かけより、顔をたたいたり、呼びかけたりしましたが、なんの反応もありません。「人が死んでる。助けて。誰か病院へ。」走り回り、bさんに病院までつれて行ってもらいました。それから数分後、cさんが、Y丸のdさんによって、遺体で発見されました。eさんがヘリコプターで、救出されたとの連絡は、唯一明るい話題です。沖へ避難した船との無線連絡は、夜を徹して行なわれました。長い長い一日でした。今でも津波の爪あととは、雪の下に残っております。それを見るたびに、我身を救ってくれた、神様と、避難もせず、私を心配してくれた皆様に感謝いたしております。

**秋田県八峰町 Dさん（被災時46歳）**

いつもより潮枯れし、海へ出るには絶好の日でした。当日に限って、今までに建てたことのないハタハタの輪壁網でタナゴを取ろうと、早朝、舟を出しました。午前11時ごろ、網を建て終え、早い昼食を取りながらテレビにスイッチを入れたところ、正午のニュースが始まったと同時に、ものすごい音を立てながら揺れて来ました。はだしのまま外に飛び出したものの、地面は地割れするくらいに揺れ、我が家は今にも壊れ落ちそうになりました。少し落ち着いたところで家に戻りましたが、津波警報は出ていません。しかし、39年の新潟地震の時、水位が上がり、舟が流されそうになったことを思い出して、「津波が来る。舟を揚げるぞ」と妻に声をかけ、自宅から70メートルほど離れた舟着場へ急ぎました。

海水が異常に引いて行く中、「セイノ、ヨイショ」と揚げ始めて間もなく、突然海水がモクモクと押し寄せて来るのが見えました。「津波だ。そら、逃げろ」と妻。先に逃がし、私は水位の上のを利用して舟を楽々と揚げようとしてしました。岸に近づくにつれ、その大きさにビックリ。これは、だめだーと夢中で逃げました。逃げながらもチラッと後を見ると、空高く舞い上がった濁流が岩石を押し流す不気味な音とともに護岸を乗り越えて来ました。必死になって坂を登りつめると、新丁町の人々もほとんど避難しているようでしたが、その時、第1波が引き始め、濁流から現れた新丁町は一瞬のうちにガレキの山と化してしまいました。

病床のおふくろが心配になり、急いでおふくろの家へ走りました。ところが、そこは家が流され誰もいません。看病に付いている兄嫁の姿もありません。押しつぶされた屋根の下敷になってはいないかと、屋根の上から夢中で叫んでみました。すると、「助けでけれ」という声が、20メートルほど離れた向い側の家の勝手口から聞こえてきました。振り向くと横倒しになった冷蔵庫に引っかかっています。後から「待で、待で」と救出に協力してくれる人がいました。さっそく2人の体を帯でつなぎ、2人の救出に向かうと、そこには死人同様にぐったりしたおふくろと、それを必死に抱きかかえる兄嫁の姿がありました。「お前、逃げろ」と兄嫁からおふくろを受け取り、冷たく死んだような体を背負いながら、急な斜面を駆け上りました。もう駄目か……。急いで救急車を要請しましたが、途中、道路でも欠壊したらしくなかなか到着しません。しかたなく、近所から毛布を借り、自家用車に移しました。時間が経つにつれて、だんだん暖かくなって来ます。助かるぞ、助かるぞーと、みんな大喜びでした。世話していただいた方々ありがとう、ありがとうございます。しかし、みんなに助けられた命も1ヵ月後には、帰らぬ人となってしまいました。

(注)「1983年 日本海中部地震 男鹿市の記録」(秋田県男鹿市発行)及び「昭和58年日本海中部地震・津波の記録 瀧安の祈り」(八森町役場発行)から一部転載